

わたしの戦争体験

福岡市西区 岡村 哲彦

「空襲日和だね……」近所の人々がふと話していた。満天にきれいな星がきらめいていた。昭和20年6月19日の夜のことである。

福岡市は、まだ空襲の『洗礼』は受けていなかった。東京、大阪を始め、全国いたるところで、米軍のB29機による洗礼が毎日のように続いていた。『福岡もいずれは……』と覚悟していた。しかし、15歳の私には、まだ空襲については、半信半疑だった。学徒動員令の下、九州兵器で魚雷製造に精魂を傾けていた頃だ。

その夜もぐったり疲れた身、寝床につくと完睡。と、いきなり母が「空襲警報」と大声で叫びながら私を起こした。「ウーッ、ウーッ……」不気味なサイレンが耳に入った。眠気も何もあったものではない。体全体が一瞬、硬直した。「バシャッ、ガーン」台所ですごい物音がした。『爆弾!!』と直感した。が、爆発しない2階にかけ上がった。なんと屋根、天井を破って焼夷弾が落下していたのだ。わが家から南側にある鳥飼の女子師範（現、南当仁小学校）から猛然と火の手が上がった。そうこうするうち、あちこちからもすごい火炎が舞い上がる。120機にも上るB29爆撃機による大空襲。たちどころに火の海と化して行く。

『わが家はまだ大丈夫?』と思ったが、いずれは類焼する。近所の人達が「大濠公園が安全。行こう」と誘ってくれた。防火用水の水をふとんにつけ、すっぽり頭に被って一目散に公園に向かう。焼夷弾は容赦なく降り注いでくる。生きた心地などしない。電線は垂れ下がり、逆まく猛炎が熱い。人の悲鳴があちこちに聞かれ、まさに『地獄』そのものだ。辛うじて公園に辿り着く。いつもは静かな公園も、この夜は人、人、人で埋まり、心配げに夜空を焦がす炎を声もなく見守るばかり。市全体が真っ赤な炎に包まれ、一瞬にして全滅状態だ。

公園に辿り着いて地行の友人のことが心配になった。彼の自宅前に防空壕があり、空襲の折は隣組の人とその中に入ると聞いていたので、余計気になった。翌日聞いたところでは、一家（両親、弟、妹の5人）は壕の入り口に直撃弾を食らい、5人は焼死し、友人一人だけが助かったという。何という悲劇だ。わずか1発の焼夷弾で友人の運命は様変わりとなろうとは……。

こういう悲劇は無数に上る。久留米の第54連隊にいた私の兄は、その夜急きよ福岡に救援にかけつけたそうだ。土居町の旧十五銀行前で通行人から「この地下室に100人以上の人がいます。電動シャッターが停電で開きません。何とかありませんか?」と、哀願されびっくり。持ち合わせのオノ、クワ、スコップなどでシャッターを叩くがビクともしない。兵隊さんたちの力を以てしても、頑丈なシャッターは無情にも動かない。「中に入っている人たちのうめき声が聞こえる。必死で助けてやりたいと焦る兵隊たちもなす術がない。残念だった」。兄の言葉に私にもその恐ろしさが伝わった。後で分かったことだが、地下室に入っていた人たちは蒸し焼きの状態だったとか。苦しかったことだろう。今でも思い出すたびに、ゾーッと身の毛が

よだつ思いだ。博多商人の町人が多かった土居町。商才に長けたすばらしい人たちがうめき亡くなっていたことを思うと、たまらないほど口惜しい思いがしてならない。

多くの死傷者を出した福岡大空襲。翌日、母の郷里鳥栖に行くため、天神までの8kmの道程を歩いた。見渡す限り一面の焼野ヶ原。歴史が刻まれた美しい街並みは瓦礫の山と化し、鼻を付くこげ臭い焼跡。なんという惨状だ。大濠の簡易保険局から岩田屋、松屋（マツヤレディース）が見える。ギッシリ建ち並んでいた家屋が木造だっただけに、みごとに焼失。一望千里の恰好となってしまったのだ。それにしてもB29機から無差別にばらまかれた焼夷弾はゆうに1万発は越えていたのではないか。ガソリンをまいて、その後に焼夷弾という作戦だった。これではひとたまりもないはずだ。

超低空飛行で空爆の成果を調べているのか、B29機の翼下のランプがついていた。大した余裕だ。ふと、中学1年の時、席田飛行場建設（現板付、福岡空港）で動員され、米軍の捕虜と一緒に働いた事を思いだした。その捕虜たちが「アメリカは勝つために戦っている。この飛行場もいずれは我々が使用するので立派に造るサ。福岡市も今に大空襲で焼かれるだろう。この飛行場だけは除外してネ」と、誇らしげにもらしていた。その2年後、現実のものとなってしまった。モッコとツルハシ、スコップでの飛行場造り。ブルドーザーで1日で滑走路を造ってしまう当時の米国。その差は余りにもひどかった。捕虜たちの優越感にひたって語る姿に少年ながら歯ぎしりしたものだ。

福岡大空襲で、果たして復興は如何にと心配でならなかった。広島に続く長崎への原爆投下、75年間は草木も生えぬといわれたものだ。神国日本といわれ、勝利を固く信じていた私もその年、8月15日の終戦で体の力が一度に抜けてしまった。

焼け跡にバラック小屋ができる。親、兄弟を失った戦災孤児が博多駅にたむろする。市内電車だけは以前のままだが、焼けただれた福博の街はまるで死の街同然だった。

あれから50年、当時50万人だった市の人口も今では倍以上の120万人。ビルが林立し、車は溢れ、文化都市、国際都市の名をほしいままにみごとに復興し、繁栄している。天神の街角に立って50年前を思い起こしてみた。全く想像もできないほどの都会になってしまった。勤勉な日本人の活力が成果を生み出したのだろうが、大空襲で尊い犠牲者となられた人たちの魂が福岡を守って下さっているとしかいいようがない。平和な現代に甘んじている私達は幸せだ。人の心を痛め、命まで奪ってしまう戦争など、二度と味わってはならない。